

十三浜に願いを込めて！

**青山商店さんのわかめ・昆布の養殖再開が
決定いたしました！**

現在、来年の収穫に向けて
準備が進んでいます

皆様たいへん嬉しいニュース
を報告します・

現在、宮城県のNPO法人「水守の郷七ヶ宿」の活動に賛同し、青山商店さんの地元、宮城県石巻市北上町十三浜地区の「日常生活を取り戻す」ためのお手伝いに出かけています。

その際、突然ですが現地十三浜地区で(有)青山商店のご主人、青山喜一様にお会いすることができました。当初、全く予定していなかった事なので、おるおるとしてしまえばかりでしたが、お手伝いに伺

った相川・小指地区は青山商店のある大指地区に隣接しており、多くのご親類やご友人がいらつしゃることがわかりました。

お話の中で、たいへん嬉しかったニュースは、『来年の収穫に向け、わかめ・昆布の養殖を再開する』と青山さん本人からお聞きする事ができました。

12月中旬には、わかめの養殖筏(いかだ)を浮かべるとの事でしたので、今頃は、大指の海に青山商店さんの筏が並んでいることと思います。

青山喜一さんより

『まずは放射線の影響を調べてからでないとお届けできるかわからない。お客様にお届けするからには、安全で安心でなければならぬ』
『十三浜のわかめ・昆布を待っていてくれる皆様に一日でも早く安全で安心なわかめ・昆布をお届けできるよう頑張っています』

あの大震災、あの大津波からまだ9ヶ月しか経過していないこの時期に、応援してください

ている皆様に、この報告ができることを今は素直に喜びたいと思います。

これまでの経緯について

東日本大震災後は、青山様ご家族の安否がわからず、インターネット検索サイト等で情報を収集する事しかできませんでした。

連日、石巻市の被害状況がテレビを通して伝えられる中、「青山さんご家族はご無事だろうか?」「どうかご無事であつて欲しい」と祈るような毎日を過ごしておりました。

4月に入り、ようやくインターネット上で青山喜一さんの避難先を教えてください、ご家族の皆様が無事に避難されていた事を知りました。

そして、多くの地域の関係者の皆様にご協力いただいた【青山さん応援募金活動】へと繋がっていきます。とここまでは、

良かったのですが、5月に「青山さん応援募金」をお届けに伺った後、具体的な支援活動を行う事ができずにおりました。

関係者それぞれが、青山さんとの関係で十三浜への想いは強く『被災地の為に行動したい』という気持ちはあるのですが、地域の状況もわからず活動することができませんでした。青山さん募金をお届けしてからのこの半年間は、皆このような気持ちで過ごしております。

そのような時、9月20日に晴海で行われた十三浜へのチャリティライブを知り「十三浜」という名前に吸い寄せられて仲間たちと共に参加してきました。このイベントを企画していただいたのが、この度、十三浜と青山さんに繋いでいただいたNPO法人「水守の郷・七ヶ宿」となります。

ライブの内容は、震災直後からの半年間の支援活動の紹介と現地十三浜相川の皆様を交えたトークライブでした。同行した仲間リーダー達は、実際に14年前に十三浜大指に青山商店さんを訪ねた経験のある仲間たちです。スライドショーの写真を観て、「知ってる！行ったことがある！」「でも昔と

ちがう」「もつと船がたくさんあった」と当時の大指港を思い出しているようでした。

また、震災後に現地を訪れている仲間リーダーは、「そうだった、津波で青山商店さんの建物はほねしか残っていなかった」と悲しい表情を浮かべていました。

このライブ参加をきっかけに、十三浜への直接的な支援活動を開始できることになり、これからも継続をして行きたいと考えています。

十三浜の事情を詳しく知っているNPO法人「水守の郷七ヶ宿」代表の海藤さんと一緒に活動させていただく事で、こちら側の一方的な都合で善意を押し付けてしまいがちな事へも充分配慮できると思っています。

ただ、「20年間にも亘り仲間たちを支え続けていただいた青山商店さんの故郷に少しでもご恩返しをしたい」というこの一点に集中し、できる範囲の支援活動を継続していきたいと思っています。



このライブ参加から青山様へ繋げていただきました

11月より、十三浜支援チームを計3回に亘り派遣し、我々にできる小さなお手伝いを行ってききました。ここからは、お手伝いに参加した職員の見聞報告をご紹介します。

第1回派遣チーム 11月2日〜4日

『石巻市十三浜での支援活動』

菅工舎 佐々木 綾太

事前に聞いていたより、十三浜の道路などは瓦礫が片付けられ、一見すると復旧が進んでいるような印象を受けました。

しかし、被害にあった学校や大指の浜辺を

目の当たりにし、今回の災害の大きさを改めて感じました。現地では、製材作業、田畑の瓦礫撤去のお手伝いを行ってきました。

作業時や交流の場を通じ、地元の方たちのもも明るい様子に触れ少し安心しましたが、3日間を通し、一人も子供の姿を見ることができなかつた事を考えても、復興への道のりは、まだまだ長いと感じました。

※現在、相川・小指地区には9名の小中学生がおりますが、この時には会う事ができませんでした。



農地の瓦礫撤去作業を行いました



『十三浜に願いを込めて!』

第1作業所 瀧島 亮

3月11日の震災から8カ月経っていましたが、被害の爪痕はすさまじく言葉を失うほどのものでした。まだまだこのような状況の中で、これからお会いする十三浜の方たちにどんな顔をして会えばいいのかわかりませんでした。

しかし、相川仮設住宅の集会所に到着すると、皆さん笑顔で迎えてくださり、楽しく食事を一緒にさせていただき、「震災なんかにかけていけない」という地元の皆様の気持ちを強く感じる事ができました。

その気持ちを後押しできるように、出来る限りの支援を続けていきたいと思えます。

第2回派遣チーム 11月18日～20日

『また来たのかあ!の再会を…』

第2作業所 蛭海 涼

2泊3日の強行軍で、何の専門的な知識も技術も持たない私達に一体何が出来るのか?と危惧していた通り、自分達にできた事といえば仮設住宅暮らしの方々に大層もてなして頂い

た挙げ句、不細工なバス停一つを完成させただけでした。

それに比べて、同じ日にボランティア活動として実施していたヘアメイクと着付けの先生・カメランが一同に集まり行なっていた七五三写真の撮影会の方がどれほど意義深く素晴らしいかつた事か…

※津波で想い出の写真を失ったご家族への心のこもった支援活動でした

それでも、お世話役の方が何かと気に掛けてくださり、最後には一緒にバス停づくりの作業までしていただき、「まっおれならもつと上手く作れっぺ」と嬉しそうに笑ってくれたのが救いでした。

私達が唯一、何か出来たとしたら、それは、「オラ達でやっぺ」と云う想いの手掛かりをつくれたということです。

暖かくなって、あのバス停が皆さんの手で美しい立派なものに立て直されていたらいいのと思います。そして、また十三浜を訪れて「また来たのかあ!」と、あの元気な老人達に云われない気持ちがあります。



バス停づくり



製材作業のようす

『決して忘れてはいけないこと』

第1作業所 金田 圭二

初めて東北を訪れた5月に比べると町の様子もずいぶんきれいになり、復興に向かって進んでいる様子が見られました。

私たちを迎えてくださった現地の人々は温かく、面白い方たちばかりでしたが、やはり被災時の話になると皆さん声を詰まらせます。

つらい気持ちは当時のまま拭えずにいることを改めて感じました。

見た目の復興と人々の気持ちは決して比例するものではないし、原発のことの方に関心が強くなってきているけれども、津波の被害にあっ
ていまだに苦しんでいる人達がいることも決して忘れてはいけないと思いました。

『相川の方々の想い』

菅工舎 池田 紋子

2日間、十三浜の相川地区に行ってきました。今回のボランティアの内容は、宮城県のNPO法人様主催のセミナーのお手伝いでした。

『学校と地域コミュニティ』（地域未来づくりについて考えるWS）は、3月11日の地震と津波で被害を受け、現在閉校になってしまっている「相川小学校を再建させたい」と願う地域の方々が、それぞれの思いを話し合い、そして今後の学校の在り方も含めて相川地区をどう変えていくかなど、復興に向けた地域の方々の貴重なお話を聞ける学習会になりました。

相川地区は、9か月が経過し瓦礫こそは無いものの、建物の基礎が残っていたり、生活道路は、ひび割れが目立ち、震災のつめ跡はまだまだ生々しく残っていました。そんな状況にも負けず、「わかめの種付けが始まったから忙しいんだ」「これからわかめの種付け行くんだ」と出かけられる方々の笑顔がとても印象的でした。

今後も、継続して、いろいろな面で長期的にお手伝いできればと思います。



被災当時のままの相川小学校



「主権在民だっぺや」（セミナー報告）

はぐるま工房 小畑美帆

今回の十三浜支援は、製材チームとセミナー＆蕎麦振る舞い手伝いチームに分かれて行ないました。私は池田職員と共にセミナーチームに参加させていただきました。

石巻北上町相川の、学校と地域を考える「未
来づくりセミナー」は第6回目を数えます。
今回は、かつて避難所であったサポートセンタ
ーに20数名が集いセミナーを開催しました。
まず、講師として招かれた、山形の元小学校校
長より「小学校は地域の宝」というテーマでお

話がありました。

給食の食材の5割を児童、教師、地域住民が協力し自家栽培した取り組み紹介があり、地域の未来を子供たちに託すため、大事な田畑をつぶしてまで学校を建設した村の歴史は、教育が立身出世だけではなく、地域をより良く変えていく手段として住民に切望されていたことを物語っていたという事を教えていただきました。

次は、3人の相川地区の方からの発表です。

震災時に災害対策本部長をされていた元郵便局長から、今回の津波で、相川地区の家屋の60%が流出し、900人の住民のうち38人が亡くなられた現状が報告されました。

また、「相川の学校の敷地には学校林があり、住民が校舎の建設、増築を担ってきたが、“津波を理由に”統廃合に拍車がかかっている」「地域コミュニティの原点は学校だ」「かつての集落を再建したい」と力説されていました。

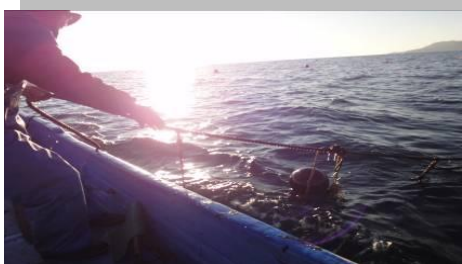
2人目の小学生のお子さんをもつお母さんからの学校に対する想いの発表内容は、複雑な心境をもの語っていました。

震災前、子供たちは7時30分に家を出て、地域の方に挨拶しながら歩いて相川小学校に登校し、帰りは寄り道しながら帰って来ていたが、今は送迎バスの通学になり、安全で決まった時間に送り届けてくれるものの、地域の人に出会う機会が減ってしまった。

だけれども、以前の相川小学校の規模では学年で10人を切ってしまう児童数しかおらず、勉強やクラブ活動、運動会が寂しくなってしまう。学校は何よりも安全な所を希望したので、たとえ小学校が合併したとしても仕方がないのではないかと子供はどこでも勉強が出来るのでは？と語ってくださいました。

3人目の相川小学校卒業生からは、1年生から6年生までの「総合」の時間に地域の方たちから教わったことを非常によく覚えおり、ていねいに説明をしてくれました。1年生の時は地域の○○さんから蕎麦の栽培と麵を作る所まで教えてもらって皆で食べた、2年生の時は地域の○○さんから帆立の養殖の仕方を教えてもらい、3年生の時には地域の○○さんから、わかめの種付けや収穫の仕方を教えてもら

った：など、地元の人々の携わる農林水産業がどのようにして栽培から口に入るまで行なわれているのかが、子ども達の中に豊かに根付いていることが感じられました。「ここにいないければ経験できませんでした」と言った後に彼女は泣き出してしまい、発表は中断してしまいました。が、コーディネーターを務めた宮城教育大学の先生より、「相川小学校がなくなってしまうと、帰る所がなくなるととても寂しい」と言いたかった、という補足説明がされました。彼女のこの発言が、この日集まった大人たちの胸に一番強く響いたように思います。



昆布の種付け作業のようす

『いつの間にか、また海に出ていた』

はぐるま工房 森崎 敏之

私は今回の十三浜支援に参加して、色々な体験をさせていただきましたが、その中でも地元の漁師さんにご指導いただき、昆布の種付け作業のお手伝いをする体験をさせていただきました。

震災時の津波で、船が流されてしまったので、2人乗りのボートで沖に出て、まずは昆布の種を取りに行きました。

60センチ四方の枠にタコ糸を縦に数本張り、そこに昆布の種が付いていて、切り取って陸に持ち帰りました。

種のついたタコ糸を2センチほどに切り、ロープの間に挟み込むという作業でした。

『一時は廃業も考えていた。しかし、時間が経つにつれて、いつの間にかまた海に出ていた』と、今年からお手伝いを始めた漁師さんの息子さんがおっしゃっていました。

漁師さんのお宅は、海の目の前にあつたようですが、そこには土台しか残っておらず、小屋だけが建っていました。そこに道具をしまつて少

しずつやり直しています。

まだまだ、時間がかかるとは思いますが、やり直す気持ちがあれば、必ず復旧・復興できると確信しました。

計3回の相川・小指地区での支援活動を通し、それぞれの職員が十三浜の方々の想いを感じ取ってくれたようです。

編集後記

北上川を十三浜方面へ下って行くと、現在でも瓦礫を撤去している光景をよく見かけます。「復興してきたな」と感じる程の目新しい変化もあまりありません。

仙台市や石巻市等の都市部とは、全く扱い（優先順位）が別なのです。

そのような十三浜ですが、少しずつ、そして着実に海と共に生きる皆様の営みが戻ってきています。

近頃は、漁船の走る姿や養殖用の筏を少しずつ目にする機会が増えてきました。

青山様からいただいたお手紙にあった

「自然は尽きるものではなく、巡るもの」という言葉を思い出し、込み上げてくるものがあります。先日お聴きした「海は豊かだから…離れられないんだ」という言葉も耳に残ります。

本当に海はとても豊かです。前回のお手伝いの際にも、地元漁師さんから差し入れをいただき、生まれて初めてオコゼの刺身があんなに美味しいと知りました。

食べるものも仕事もこの豊かな海にあります。時にはかけがえのない命も奪っていつてもまいます。

中途半端な都会で生まれ育った私が海と共に生きて来られた被災地の皆様のお気持ちを理解することなど到底できませんが、

十三浜を訪れる度、自然の厳しさと豊かさに圧倒され、心豊かな皆様とのご縁をいただけた事に感謝をしています。

いつか川崎地域の皆様と仲間たち全員に十三浜をご紹介できる日を楽しみにしております。

特集号 編集担当 福田 真